

メコン・サルウィン水系中流域における青銅器文化 ：ヘーガー?式銅鼓に焦点をあてた研究を通して

著者	川島 秀義
ファイル(説明)	学位論文の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第16号
URL	http://hdl.handle.net/10232/21915

学 位 論 文 の 要 旨	
氏 名	川島 秀義
学位論文題目	メコン・サルウィン水系中流域における青銅器文化 —ヘーガーⅢ式銅鼓に焦点をあてた研究を通して—
<p>本論文では、東南アジアにおける青銅器文化研究の中でも空白地となっているメコン・サルウィン水系中流域(東南アジア北西部)を対象地域としており、中国南部から東南アジア地域における青銅器文化研究の中心を担ってきた銅鼓研究の中でも研究が立ち遅れているヘーガーⅢ式銅鼓の研究に焦点をあて、考古学だけでなく民俗学的な視点を通して、その中心的分布域に該当するメコン・サルウィン水系中流域の特徴や周辺地域との関係性を明らかとし、この地域の重要性だけでなく銅鼓研究において民俗資料として認識される傾向が強く、研究対象として取り扱われる機会が少ないヘーガーⅢ式銅鼓の重要性を捉え、当該地域の青銅器文化研究を進展させることを目的としている。</p> <p>論文中では、ラオスで確認されたヘーガーⅢ式銅鼓を中心資料として、タイ、ミャンマー、中国の資料も取り扱い、Ⅲ式銅鼓鑄造技術およびその編年と分類、ラオスに居住するカムーおよびラメットにおけるⅢ式銅鼓民俗事例、Ⅲ式銅鼓関連遺跡に関する考察をおこない、メコン・サルウィン水系中流域の青銅器文化に関する特徴を提示することにより、本論の目的を達成させる。</p> <p>論文構成は以下のとおりである。</p> <p>1章 銅鼓 1節 銅鼓分類および編年研究史概観 2節 ヘーガーⅢ式銅鼓</p> <p>2章 ヘーガーⅢ式銅鼓 1節 製作技術 2節 編年と分類 3節 最古段階とその先行形態の位置づけ</p> <p>3章 ラオスにおける銅鼓と民俗 1節 銅鼓習俗 2節 銅鼓流通と製作地 3節 銅鼓関連遺跡</p> <p>終章 メコン・サルウィン水系中流域における青銅器文化 1節 本論におけるⅢ式銅鼓研究成果 2節 メコン・サルウィン水系中流域における地</p>	

域の特徴 3節 展望

1章では、銅鼓全体の研究史、特に分類と編年に関する研究史を中心にとりまとめ、さらに本論における対象資料の中心であるヘーガーⅢ式銅鼓に関しては、詳細な研究史をとりあげ、分布、特徴(紋様と装飾)、分類、系統と年代について記述した。また、分類および系統と年代に関しては、各研究者の見解を取り上げ、その対応関係に関して表を作成してそれぞれの位置関係を概観することを試みた。

2章では、ヘーガーⅢ式銅鼓の製作技術、編年と分類、最古段階とその先行形態の位置づけについて論じた。製作技術に関しては、民俗事例を交え、銅鼓製作工程において残存したと考えられる痕跡に着目し、鋳造方法、施文具と型、施文順位等について言及した。編年と分類に関しては、鼓面に設置されている蛙立体像の背面紋様に着目して、その変遷状況を中心とした編年について論じ、さらに蛙立体像背面紋様と銅鼓に用いられている紋様、立体像、装飾の変遷および組み合わせパターン等の要素との対応関係から3分類を試み、その系統および年代的な位置関係について言及した。最古段階とその先行形態の位置づけに関しては、Ⅲ式銅鼓最古段階またはⅠ式銅鼓に位置づけられていた資料と、本論におけるⅢ式銅鼓分類の1類を比較することにより前者の資料をⅢ式銅鼓から切り離した。さらに、それらの資料とⅠ式銅鼓における紋様配置パターンを比較することにより、ABの2分類をおこない、複画文帯銅鼓と単画文帯銅鼓との対応関係を指摘し、その位置づけを試みた。

3章では、ラオスにおける銅鼓民俗事例を中心に取り扱い、銅鼓習俗、流通と製作地、Ⅲ式銅鼓との関連が考えられる立石について論じた。銅鼓習俗に関しては、習俗の差異に着目し、その要因としてエスニック・グループの差異を挙げ、さらにそれらが地域と連動することによって習俗が変容している可能性を指摘した。流通と製作地に関しては、ラオスのカムーにおける流通形態を距離に応じて分類し、その状況からラオスにおける流通拠点に関して言及し、さらに、本論におけるⅢ式銅鼓分類との関係からラオスにおける銅鼓製作地の可能性に関して論じた。立石に関しては、紋様の比較から銅鼓との関係を明確にし、用いられている紋様の特徴から、紋様が有する意味について富を象徴している可能性について論じた。

終章では、本論第2章、第3章で論じたⅢ式銅鼓の研究成果を概観すると同時に、銅鼓の

特徴と地域の関係、銅鼓とエスニック・グループの関係、銅鼓と遺跡の関係について論じた。銅鼓の特徴と地域の関係では他型式の銅鼓とは異なるⅢ式銅鼓の特徴として失竄法に、銅鼓とエスニック・グループの関係ではⅢ式銅鼓分類における分布状況に、銅鼓と遺跡の関係では立石に用いられている紋様に着目して、それらとメコン・サルウィン水系中流域における地域の特徴との関係について論じた。また、今後の展望として分布と紋様に関して、Ⅲ式銅鼓分布域で確認できる空白部や分類における特徴を示す装飾に着目して、Ⅲ式銅鼓とタイ諸語に属するエスニック・グループの間に強い関係が存在する可能性について述べた。

平成23年1月29日

鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科長 殿

学位(博士)論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 川島 秀 義

学位論文題目

メコン・サルウィン水系中流域における青銅器文化

-ヘーガーⅢ式銅鼓に焦点をあてた研究を通して-

(The Bronze Culture in the Middle Mekong and the Salween River Basins

- a special reference to Heger III bronze drums -)

論文審査の概要

1. 論文の狙いと概要

これまで研究の対象となることがほとんどないにもかかわらず、現在でも東南アジアや中国南部の少数民族の世界で使用されているヘーガーⅢ式銅鼓の分類、編年、民俗学的研究によって、中国南部、ミャンマー、ラオス、タイにまたがる地域において、青銅器が儀器として使用された文化の解明を目的とするものである。

これらの地域に特徴的に分布する青銅器であるⅢ式銅鼓の分析が本論の中心となる。Ⅲ式銅鼓の概念をその紋様と鑄造方法の二つの面から規定し、独特の紋様を持ち、かつ失蠟法による鑄造によって製作された銅鼓とした。分類と編年については、鼓面上のカエル立像背面の紋様の分析に基づき、その紋様の変遷と、鼓面紋様とのパターンとの対応関係から3類に分類し、1~3類への変遷過程を設定した。さらにⅢ式最古段階と考えられてきた銅鼓を2群に分け、そのうちラオス、タイで発見されたii類を最古段階のものとした。実年代については9~10世紀に始まり、19世紀まで製作されたとする。

以上の考古学的分析に基づき、Ⅲ式銅鼓を伴う文化は先行形態の銅鼓を持つ他地域から

の文化的影響によって、この地で成立したと結論付けた。その背景として、中国南部とラオス、ミャンマーに居住した、さまざまなエスニック・グループの交流があったことを想定した。

2. 論文の構成

論文の構成は以下のとおりである。

序章

中国、ミャンマー、ラオス、タイにまたがる地域はさまざまな要因によって考古学的研究があまり進展していない空間であった。Ⅲ式銅鼓は当該地域における極めて特徴的な青銅器であり、かつ考古学、民俗学的資料として重要であることを述べる。しかし、現時点でのⅢ式銅鼓の研究はほぼ空白状態であり、この銅鼓の研究の進展が当該地域の文化研究を進展させる重要なポイントであることを力説し、そのためにⅢ式銅鼓の分類、編年研究、民俗的研究によって解明しようとする目的と方法の概略を述べている。

第1章 銅鼓

銅鼓はF.ヘーガーの分類を基に、先Ⅰ式、Ⅰ式、Ⅱ式、Ⅲ式、Ⅳ式に分類されているが、ここでは関連する先行研究をまとめ、各研究を対比させながら、分類と編年に関する先行研究を概観することによって、先行研究の問題点をあげる。さらにⅢ式銅鼓についても同様に先行研究を対比させて、現在の問題点をあげる。

第2章 ヘーガーⅢ式銅鼓

本論文の根幹を形成する部分である。自身が収集した160点の資料を詳細に分析し、Ⅲ式銅鼓の製作技術の解明、編年、分類を行い、それに基づいて、Ⅲ式銅鼓の最古タイプを抽出し、さらに最古式に先行する、Ⅲ式銅鼓の系統の起源について論じた。すなわちⅠ式銅鼓の変容タイプを起源として、9～10世紀に製作が始まり、19世紀後半まで作られ続けたと結論づけた。

第3章 ラオスにおける銅鼓と民俗

Ⅲ式銅鼓が多く分布するラオスにおいて、その民俗事例から、銅鼓を使う習俗、銅鼓の流通と製作地の問題を取り上げた。習俗についてはエスニック・グループごとに差異があること、銅鼓の流通に関しては遠距離間ではなく、比較的短距離間で移動していること、したがって製作地も現在の分布域内あるいはそれに近いところにあったと推定した。

終章 メコン・サルウィン水系中流域における青銅器文化

Ⅲ式銅鼓を伴う文化は先行形式銅鼓の存在する他地域からもたらされたこと、Ⅲ式銅鼓を規定する鑄造法・失蠟法は先行形式銅鼓にはないことから、Ⅲ式銅鼓はメコン・サルウィン水系で生まれたことを指摘した。さらに、当初はタイ北部を含めた広い地域に分布していたが、Ⅲ式銅鼓をもつエスニック・グループの居住域の変動により現在のような分布状況を示すようになったと推定した。

3. 本論文の評価すべき点

もっとも高く評価できることは、中国、東南アジア、日本の各地に所蔵されている 160 点以上に及ぶⅢ式銅鼓を、所蔵先を訪れて詳細に観察し、その結果としての分類と編年をつくりあげたことにある。すべてが現地での調査に基づいたものである。従来の研究では、少数の資料に立脚したものがほとんどであった。第 2 に、Ⅲ式銅鼓を明確に定義付け、失蠟法による鑄造と紋様の特徴から最古式のⅢ式銅鼓をつきとめ、その祖形と系統を提示したことである。第 3 には、現在のⅢ式銅鼓の分布を諸集団の居住の変動の結果と推定し、考古学的データと民族誌的データをリンクさせようとする新たな試みを提示したことである。本論文は研究の蓄積がほとんどなかったⅢ式銅鼓に対する初めての本格的な研究として高く評価できる。

4. 問題点

本論文中の「青銅器文化」は、考古学上の「青銅器文化」とは全く異なる概念であり、誤解を招くものである。このような名称は不適切である。よりふさわしい名称を設定すべきであった。また、実年代については、ただ 1 例の銅鼓に記された「文字」（とされる記号）の年代について、ひとりのラオ人碑文学者の意見を絶対視している点は危険性がある。複数の研究者の意見も聴取すべきであった。さらに、技術上の問題において重要な問題となった失蠟法自体は、すでに中国、東南アジアにおいては紀元前に完成されており、Ⅲ式銅鼓初現期の 9～10 世紀に、なぜこの地に突如現れるのか、その理由について納得のいく説明が欠けている。

Ⅲ式銅鼓が考古資料としては扱うことが難しい伝製品ばかりで、年代決定に必要な伴出品を伴う出土資料がないという研究上の困難さがあるので、さらなる方法論的検討が必要である。

5. 総合評価

本論文は前記のようないくつかの問題点はあるものの、従来ほとんど研究されてこなかったⅢ式銅鼓を、2年間のラオス留学時、さらにはその前後に幾度となく現地調査を行い、収集した多数の資料を駆使して、考古学上のもっとも重要な問題点である、分類と編年、祖形と系統の推定、技術に関して、明確な視点を提示したものである。本論文はⅢ式銅鼓に対する初めての本格的研究であり、今後の銅鼓研究に寄与するところが大きい。同時に著者の今後の研究の展開が期待できる。よって、本審査委員会は全員一致で博士の水準に達していると判定した。

授与する博士学位 學術

論文審査結果 合・否

審査委員

主査 (氏名) 新田 菜治

副査 (氏名) 桑原 亨隆

副査 (氏名) 渡辺 芳郎

副査 (氏名) 菊池 誠一

平成22年1月29日

鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科長 殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 川島 秀義

学位論文題目

メコン・サルウィン水系中流域における青銅器文化
-ヘーガーⅢ式銅鼓に焦点をあてた研究を通して-
(The Bronze Culture in the Middle Mekong and the Salween River Basins
- a special reference to Heger III bronze drums -)

最終試験の概要

平成23年1月28日に、審査委員全員出席のもとで口頭試問を実施した。
提出論文の内容について、被審査者による口頭での説明を行った後に、各審査委員からの質問に答えるかたちで進行し、被審査者の退席後、審査委員の討議を経て、判定を行った。

本論文はこれまで研究の対象となることがほとんどないにもかかわらず、現在でも東南アジアや中国南部の少数民族の世界で使用されているヘーガーⅢ式銅鼓の分類、編年、民俗学的研究によって、Ⅲ式銅鼓の分布する地域において、青銅器が儀器として使用された文化の解明を目的とするものである。

これらの地域に特徴的に分布する青銅器であるⅢ式銅鼓の分析が本論の中心となる。Ⅲ式銅鼓の概念をその紋様と鑄造方法の二つの面から規定し、独特の紋様を持ち、かつ失蠟法による鑄造によって製作された銅鼓とした。分類と編年については、鼓面上のカエル立像背面の紋様の分析に基づき、その紋様の変遷と、鼓面紋様とのパターンとの対応関係か

ら3類に分類し、1～3類への変遷過程を設定した。さらにⅢ式最古段階と考えられてきた銅鼓を2群に分け、そのうちラオス、タイで発見されたii類を最古段階のものとした。実年代については9～10世紀に始まり、19世紀まで製作されたとする。以上の考古学的分析に基づき、Ⅲ式銅鼓を伴う文化は先行形態の銅鼓を持つ他地域からの文化的影響によって、この地で成立したと結論付けた。その背景として、中国南部とラオス、ミャンマーに居住した、さまざまなエスニック・グループの交流があったことを想定した。

本論文においてもっとも高く評価できることは、中国、東南アジア、日本の各地に所蔵されている160以上に及ぶⅢ式銅鼓を、所蔵先を訪れて詳細に観察し、その結果としての分類と編年をつくりあげたことにある。すべてが現地での調査に基づいたものである。従来の研究では、少数の資料に立脚したものがほとんどであった。第2に、Ⅲ式銅鼓を明確に定義付け、失蠟法による鑄造と紋様の特徴から最古式のⅢ式銅鼓をつきとめ、その祖形と系統を提示したことである。第3には、現在のⅢ式銅鼓の分布を諸集団の居住の変動の結果と推定し、考古学的データと民族誌的データをリンクさせようとする新たな試みを提示したことである。本論文は研究の蓄積がほとんどなかったⅢ式銅鼓に対する初めての本格的な研究として高く評価できる。

しかしながら、いくつかの重要な問題点も指摘できる。なかでも論文中に記された「青銅器文化」は、考古学上の「青銅器文化」とは全く異なる概念であり、誤解を招くものである。このような名称は不適切である。よりふさわしい名称を設定すべきであった。また、実年代については、たった1例の銅鼓にのみ記された「文字」（であると主張されている記号）の年代を、ひとりの研究者の意見による「古ラオ文字で、16世紀」であるとして絶対視している点は危険性がある。さらに、Ⅲ式銅鼓製作において技術上重要な問題となった失蠟法自体は中国、東南アジアにおいてはるか以前の紀元前に完成されており、Ⅲ式銅鼓初現期の9～10世紀に、この地に突如現れる理由について納得のいく説明が欠けている。また、Ⅲ式銅鼓が考古資料としては扱うことが難しい伝製品ばかりで、年代決定に必要な伴出品を伴う出土資料がないという研究上の困難さがあるので、さらなる方法的検討が必要である。

本論文は前記のようないくつかの問題点はあるものの、従来ほとんど研究されてこなかったⅢ式銅鼓を、2年間のラオス留学時、さらにはその前後に幾度となく現地調査を行い、収集した多数の資料を駆使して、分類と編年、祖形と系統の推定、技術に関して、明確な視点を提示したものである。本論文はⅢ式銅鼓に対する初めての本格的な研究であり、今後

の銅鼓研究に寄与するところが大きい。同時に著者の今後の研究の展開が期待できる。
よって、本審査委員会は全員一致で博士の水準に達していると判定した。

授与する博士学位 学術

最終試験結果 合・否

試験委員

主査 (氏名) 新田栄治

副査 (氏名) 桑原季雄

副査 (氏名) 渡辺芳郎

副査 (氏名) 菊池誠一